

[B年] 公現後第6日(2023年2月12日)

【旧約聖書日課】 ヨブ記 2章1～10節

¹またある日、主の前に神の使いたちが集まり、サタンも来て、主の前に進み出た。²主はサタンに言われた。

「お前はどこから来た。」

「地上を巡回しておりました。ほうぼうを歩きまわっていました」とサタンは答えた。

³主はサタンに言われた。

「お前はわたしの僕ヨブに気づいたか。地上に彼ほどの者はいまい。無垢な正しい人で、神を恐れ、悪を避けて生きている。お前は理由もなく、わたしを啖して彼を破滅させようとしたが、彼はどこまでも無垢だ。」

⁴サタンは答えた。

「皮には皮を、と申します。まして命のためには全財産を差し出すものです。⁵手を伸ばして彼の骨と肉に触れてごらんください。面と向かってあなたを呪うにちがいません。」

⁶主はサタンに言われた。

「それでは、彼をお前のいいようにするがよい。ただし、命だけは奪うな。」

⁷サタンは主の前から出て行った。サタンはヨブに手を下し、頭のとっぺんから足の裏までひどい皮膚病にかからせた。⁸ヨブは灰の中に座り、素焼きのかげらで体中をかきむしった。

⁹彼の妻は、

「どこまでも無垢でいるのですか。神を呪って、死ぬ方がましでしょう」と言ったが、¹⁰ヨブは答えた。「お前まで愚かなことを言うのか。わたしたちは、神から幸福をいただいたのだから、不幸もいただこうではないか。」このようになって、彼は唇をもって罪を犯すことをしなかった。

【使徒書日課】 使徒言行録 3章1～10節

¹ペトロとヨハネが、午後三時の祈りの時に神殿に上って行った。²すると、生まれながら足の不自由な男が運ばれて来た。神殿の境内に入る人に施しを乞うため、毎日「美しい門」という神殿の門のそばに置いてもらっていたのである。³彼はペトロとヨハネが境内に入ろうとするのを見て、施しを乞うた。⁴ペトロはヨハネと一緒に彼をじっと見て、「わたしたちを見なさい」と言った。⁵その男が、何かもらえんと思って二人を見つめていると、⁶ペトロは言った。「わたしには金や銀はないが、持っているものをあげよう。ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい。」⁷そして、右手を取って彼を立ち上がらせた。すると、たちまち、その男は足やくるぶしがしっかりして、⁸躍り上が

って立ち、歩きだした。そして、歩き回ったり躍ったりして神を賛美し、二人と一緒に境内に入って行った。⁹民衆は皆、彼が歩き回り、神を賛美しているのを見た。¹⁰彼らは、それが神殿の「美しい門」のそばに座って施しを乞うていた者だと気づき、その身に起こったことに我を忘れるほど驚いた。

【福音書日課】 ルカによる福音書 5章12～26節

¹²イエスがある町におられたとき、そこに、全身重い皮膚病にかかった人がいた。この人はイエスを見てひれ伏し、「主よ、御心ならば、わたしを清くすることがおできになります」と願った。¹³イエスが手を差し伸べてその人に触れ、「よろしい。清くなれ」と言われると、たちまち重い皮膚病は去った。¹⁴イエスは厳しくお命じになった。「だれにも話してはいけない。ただ、行って祭司に体を見せ、モーセが定めたとおりに清めの献げ物をし、人々に証明しなさい。」¹⁵しかし、イエスのうわきはますます広まったので、大勢の群衆が、教えを聞いたり病気をいやしていただいたりするのために、集まって来た。¹⁶だが、イエスは人里離れた所に退いて祈っておられた。

¹⁷ある日のこと、イエスが教えておられると、ファリサイ派の人々と律法の教師たちがそこに座っていた。この人々は、ガリラヤとユダヤのすべての村、そしてエルサレムから来たのである。主の力が働いて、イエスは病気をいやしておられた。¹⁸すると、男たちが中風を患っている人を床に乗せて運んで来て、家の中に入れてイエスの前に置こうとした。¹⁹しかし、群衆に阻まれて、運び込む方法が見つからなかったので、屋根に上って瓦をはがし、人々の真ん中のイエスの前に、病人を床ごとつり降ろした。²⁰イエスはその人たちの信仰を見て、「人よ、あなたの罪は赦された」と言われた。²¹ところが、律法学者たちやファリサイ派の人々はあれこれと考え始めた。「神を冒瀆するこの男は何者だ。ただ神のほかには、いったいだれが、罪を赦すことができるだろうか。」²²イエスは、彼らの考えを知って、お答えになった。「何を心の中で考えているのか。²³『あなたの罪は赦された』と言うのと、『起きて歩け』と言うのと、どちらが易しいか。²⁴人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることを知らせよう。」そして、中風の人に、「わたしはあなたに言う。起き上がり、床を担いで家に帰りなさい」と言われた。²⁵その人はすぐさま皆の前で立ち上がり、寝ていた台を取り上げ、神を賛美しながら家に帰って行った。²⁶人々は皆大変驚き、神を賛美し始めた。そして、恐れに打たれて、「今日、驚くべきことを見た」と言った。

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

ヨブ記 2章1～10節

「またある日、神の子らが来て、主の前に立った。サタンもまたその中に来て、主の前に立った。²主はサタンに言われた。

「あなたはどこから来たのか。」

サタンは主に答えた。

「地を巡り、歩き回っていました。」

³主はサタンに言われた。

「あなたは私の僕ヨブに心を留めたか。地上には彼ほど完全で、正しく、神を畏れ、悪を遠ざけている者はいない。あなたは私を唆し、理由なく彼を滅ぼそうとしたが、彼はなお完全であり続けている。」

⁴サタンは主に答えた。

「皮には皮を、と言います。人は自分の命には、すべてを差し出します。⁵あなたの手を伸ばして、彼の骨と肉を打ってごらん下さい。彼は必ずや面と向かって、あなたを呪う〔直訳→祝福する〕に違ひありません。」

⁶主はサタンに言われた。

「では、彼をあなたの手に乗せる。ただし、彼の命は守れ。」

⁷サタンは主の前から出て行き、ヨブの足の裏から頭の頂まで、悪性の腫れ物で彼を打った。⁸ヨブは土器のかけらを取って体をかきむしり、肺の中に座った。

⁹彼の妻は言った。

「あなたは、まだ完全であり続けるのですか。神を呪って死んでしま下さい。」

¹⁰しかし、ヨブは彼女に言った。

「あなたは愚かな者が言うようなことを言う。私たちは神から幸いを受けるのだから、災いをも受けようではないか。」

このような時でも、ヨブはその唇によって罪を犯さなかった。

使徒言行録 3章1～10節

¹さて、ペトロとヨハネは、午後三時の祈りの時間に神殿に上って行った。²すると、生まれつき足の不自由な男が運ばれて来た。神殿の境内に入る人に施しを乞うため、毎日「美しい門」と呼ばれる神殿の門のところに置いてもらっていたのである。³彼はペトロとヨハネが境内に入ろうとするのを見て、施しを乞うた。⁴ペトロはヨハネと一緒に彼をじっと見て、「私たちを見なさい」と言った。⁵その男が、何かもらえるのかと期待して二人に注目していると、⁶ペトロは言った。「私には銀や金はないが、持っているものをあげよう。ナザレの人イエ

ス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい。」⁷そして、右手を取って立ち上がらせた。すると、たちまち、その男は足やくるぶしがしっかりと、⁸躍り上がって立ち、歩きだした。そして、歩き回ったり躍ったりして神を賛美し、二人と一緒に境内に入って行った。⁹民衆は皆、彼が歩き回り、神を賛美しているのを見た。¹⁰彼らは、それが神殿の「美しい門」のそばに座って施しを乞うていた者だと気づき、その身に起こったことに驚いて、卒倒しそうになった。

ルカによる福音書 5章12～26節

¹²イエスがある町におられたとき、そこに、全身規定の病を患っている人がいた。この人はイエスを見てひれ伏し、「主よ、お望みならば、私を清くすることがおできになります」と願った。¹³イエスが手を差し伸べてその人に触れ、「私は望む。清くなれ」と言われると、たちまち既定の病は去った。¹⁴イエスは彼に厳しくお命じになった。「誰にも話してはいけない。ただ、行って祭司に体を見せ、モーセが定めたとおりに清めの献げ物をし、人々に証明しなさい。」¹⁵しかし、イエスの評判はますます広まり、大勢の群衆が、教えを聞いたり病気を治してもらうために集まって来た。¹⁶だが、イエスは寂しい所に退いて祈っておられた。

¹⁷ある日のこと、イエスが教えておられると、ファリサイ派の人々や律法の教師たちがそこに座っていた。この人々は、ガリラヤとユダヤのあらゆる村や、エルサレムから来ていた。主の力が働いて、イエスは病気を癒しておられた。¹⁸すると、男たちが体の麻痺した人を床に乗せて運んで来て、家の中に入れてイエスの前に置こうとした。¹⁹しかし、大勢人がいて、運び込む方法が見つからなかったため、屋根に上って瓦を剥がし、病人を床ごと群衆の真ん中につり下ろし、イエスの前に置いた。²⁰イエスは彼らの信仰を見て、「人よ、あなたの罪は赦された」と言われた。²¹ところが、律法学者たちやファリサイ派の人々は論じ始めた。「神を冒瀆するこの男は何者だ。罪を赦すことができるのは、ただ神だけだ。」²²イエスは、彼らの考えを見抜いて言われた。「何を心の中で考えているのか。²³『あなたの罪は赦された』と言うのと、『起きて歩け』と言うのと、どちらが易しいか。²⁴人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることを知らせよう。」そして、体の麻痺した人に、「あなたに言う。起きて床を担ぎ、家に帰りなさい」と言われた。²⁵その人はすぐさま皆の前で立ち上がり、寝ていた床を担いで、神を崇めながら家に帰って行った。²⁶人々は皆驚嘆し、神を崇め、恐れに満たされて、「今日、驚くべきことを見た」と言った。

黙想のためのノート

次主日の教会暦と聖書日課

・2月12日「公現後第12主日」の日課主題は「いやすキリスト」。

・旧約聖書日課は、「ヨブ記」から、ヨブがサタンの試みを受けながら無垢であり続けようとする姿を物語る箇所。使徒書日課は、「使徒言行録」から、聖霊降臨後の使徒たちが為した足の不自由な人を立ち上がらせる奇跡を伝える箇所。福音書日課は、「ルカによる福音書」から、主イエスが宣教活動の初期に為された一連の癒しの奇跡を伝える箇所。

旧約日課(ヨブ2章より)

・「ヨブ記」は、ユダヤ正典「諸書」に収められた文書の一つ。「箴言」や「コヘレトの言葉」と共に「知恵文学」に分類される。著者(编者)や著作年代に関する情報は、本文に一切ない。登場人物の「ヨブ」は、「エゼキエル書」で「ノア」や「ダニエル」と共に「義人」の名として挙げられており(エゼ14:14など)、バビロン捕囚期までには広く「義人ヨブ」の伝承が知られていたと考えられるが、「ノア」や「ダニエル」と共にその実在についてはまったくわからない。「ヨブ」の物語の場面設定は「ウツの地」(1:1)とされ、この地が「東の国」(1:3)に位置していたことだけが示唆されているが、考古学上特定されえない。一般的には、死海の東側の「エドムの地」、または、アブラハムの出身地「ハラン」地方が想定されている。いずれにしても、「ヨブ記」は、「天幕」を住居とする遊牧生活者としての「ヨブ」を設定しており、アブラハムの時代やモーセの荒野時代など、古い時代の物語として認識されていたことは間違いない。実際、ユダヤ教の伝統で「ヨブ記」は、もっとも古い文書とみなされることがある。

・「ヨブ記」は、一般に「苦難(不条理)の意味を問う物語」として理解されてきた。このような主題の文学作品は、古代オリエント世界で前2000年ごろ以降、広く知られている。「コヘレトの言葉」は、同じ主題を別の切り口で問い、「ヨブ記」とは異なる結論を示した文書と見ることができる。

・一般に考えられている主題にもかかわらず、日課箇所ですら実際に問われているのは、「義人と呼ばれるヨブがどのような状況でも「無垢(完全・高潔)」(3節、9節)であり続けるべきなのか、ということ。これを修辭的に示唆していると考えられる用語法として、「ヨブ記」では、「呪う」と訳されている語が「祝福する/ほめたたえる」を意味するヘブライ語「バーラク」で記されている(日課箇所では、5節と9節)。これは、文脈上「呪う」と書かれるであろう箇所が敢えて「祝福する」の語で書かれていると解されて、伝統的に「呪う」と訳されてきたことであるが、「ヨブ」の「無垢」さが言葉の上でも「神を呪う」ことがありえないという前提で、この用法を婉曲表現あるいは反語表現とみなしてきたのである。もっとも「祝福する」と訳しても意味は通じる。なお、

「祝福する」または「呪う」と訳されている「バーラク」の原意は、「膝を曲げる/跪く」。

・「ヨブ記」を含む「旧約聖書」で「サタン(サターナ)」は、「新約」で「悪魔」と同一視されるサタンとは異なり、「神/主の御使い」の一形態として登場する。「民数記」で「妨げる者」の訳で登場する(民22:22)。「ヨブ記」は、この「サタン」を含む「御使いたち」が、天上で「主」のもとに会議を開いているイメージを取り入れている。このような「天上の会議」のイメージは、正典の「律法」や「預言者」には見られず、ペルシヤの宗教(ゾロアスター教?)の影響などが考えられている。

使徒書日課(使徒3章より)

・「使徒言行録」は、「ルカ福音書」とともに「ルカ文書」と総称される文書。使徒パウロに近い人物(ルカ?)が著したと考えられ、「使徒たちの教会共同体」として出発した教会の枠組みの中に、後から加わったパウロらのグループが立ち位置を保持し続けたことに焦点を定めた物語展開がされている。パウロが活動した時期、ペトロらを中心とした主流の「使徒たちの教会共同体」が広く形成され始めていたが、パウロのグループや、「使徒」の中に名を連ねながら「ユダヤ伝統主義」の立場を堅持し続ける「使徒ヨハネ」や「主の兄弟ヤコブ」のグループの存在などにより、必ずしも一致した統制の取れた宗団としては成立していなかった。「使徒言行録」は、これらの諸グループがペトロら主流の「使徒たちの教会共同体」から分離せずに一致を保ち続けようとした時代の様子を、特に「パウロ」に焦点を当てて物語ろうとしているのであろう。

・日課箇所は、初代エルサレム教会の時代に、ペトロとヨハネが神殿礼拝に勤しむ中で、一人の足の不自由な人を「イエス・キリストの名」によって癒した奇跡伝承。「福音書」では、主イエスの側近的な弟子として、「ペトロとヤコブとヨハネ」の三人が挙げられており、初代教会もこの三人を中心に立ち上げられたと考えられる。また、「パウロ書簡集」にも、エルサレムで「柱と目されるおもだった人たち」として「ヤコブとケファ(=ペトロ)とヨハネ」の三人の名が挙げられている(ガラテヤ2:9)。パウロが挙げている三人のうち「ヤコブ」は、「主の兄弟ヤコブ」(同1:19)と考えられるので、主イエスの側近的弟子の「ヤコブ」とは異なるが、「三人」という枠組みで初代教会の指導者が認知されていたのは間違いないだろう。日課箇所では、その「三人」のうち二人、「ペトロとヨハネ」だけが行動を共にしている。この使徒「ヨハネ」は、8章の「フィリポのサマリア伝道」の逸話でもペトロと行動を共にしたとされているが、その後は登場しない。

・「足の不自由な人」の癒しは、主イエスのなされたこととしては総論として報告されているだけで、具体的に癒された人の逸話は、「ヨハネ福音書」が伝える一例しかない(ヨハネ5章)。一方、「使徒言行録」は、日課箇所の他に、パウロの為した逸話としても伝えている(使徒14:8以下)。

福音書日課(ルカ5章より)

・日課箇所は、主イエスが弟子たちを従わせて活動を始められた初期の一連の逸話の一部で、重い皮膚病の人の癒しの逸話と中風の人の癒しの逸話の箇所。「共観福音書」(マタイ、マルコ、ルカ)が共通で伝えており、元来、「四人の漁師を弟子にする」逸話から始まって「十二人の選び」の逸話までを枠とするまとまりのある伝承集であったと考えられる。この伝承集は、「弟子の召命と選び」という枠組みの中で、主イエスが弟子たちに示された「ユダヤ教の課題」をさまざまな逸話を通して提示するという構成になっている。

・日課箇所のうち「重い皮膚病の人の癒し」は、「皮膚病」によって社会的に隔離された人間が社会復帰する手順を明示した「律法」の規定(レビ 13~14 章)が、実際には機能していなかった現実を指摘し、問題提起していると考えられる。「律法」の規定では、「皮膚病」の治癒を認定し「清めの儀式」を導くのは、祭司の役目である。「マルコ福音書」は、この逸話の結末として、癒された男が主イエスの指示に従って祭司のもとに行くことをせずにいる様子を描いている。「ルカ」がそのことを曖昧にしているのは、それが「律法」にも主イエスの指示にもそぐわない行動であったからだろう。しかし、結局のところ「共観福音書」は共通して、社会的に疎外された者の社会復帰として位置づけられる「皮膚病の癒しと清め」を、「律法」によらず主イエスの御業によって乗り越えられたことと考えている。

・後半の「中風の人の癒し」の逸話は、「罪の赦しの宣言」の是非が問題として提起されている。前提として、「病氣」の者が「罪人」と同様に社会から疎外された扱いを受けていた現実があった。「律法」の諸規定は、個々の規定違反についての処置や罰則を具体的に定めているが、実際に社会の中でなされる「罪人」認定は観念的なものであり、通念として「罪人は共同体から排除されるべき」という認識が広く行き渡っていた。「罪の赦しの宣言」は、その「共同体からの排除」を解除し、「共同体に復帰」させることを意味する。日課箇所の逸話では、主イエスが「罪の赦しの宣言」をしたことの是非が問題になっているように描かれているが、この逸話全体は、「中風を患っている人」がすでに「男たち」の手によって「人々の真ん中」すなわち「共同体の中心」に戻されたことをもって、主イエスが「罪の赦し」=「共同体への復帰」が起こっていることを宣言された、という建付けになっている。

来週の誕生日 (2月12日~18日)**主日礼拝の讃美歌から**

・21-355 番「主をほめよ わが心」(= I 76 歌詞)は、19-20 世紀英国の医師ブリッジズの作詞とされているが、原詞は英語ジュネーブ詩編歌集に収められたウィリアム・キース作の詩編 104 のパラフレーズ。曲は、J.M.ハイドン。

- ・21-446 番「主が手を取って起こせば」は、教団牧師・今駒泰成が「ともにうたおう」(1976 年発行)編纂に先立つ歌詞公募に応募した歌詞。今駒が盲人キリスト教伝道協議会の働きに従事する中で着想した。今駒の歌詞は、他に 58 番「み言葉をください」など。曲は、この歌詞のために、カトリック信徒の作曲家・新垣壬敏が作曲。新垣の曲は、他に 5 番「わたしたちは神の民」や 81 番「主の食卓を囲み」など。
- ・21-448 番「お招きに応えました」は、20 世紀米国メソジスト教会牧師で 20 世紀後半の英語讃美歌創作運動(ヒム・エクスプロージョン)の中心的担い手となったグリーンが信仰告白式・堅信式のための讃美歌として作詞。曲は、教会旋法第 6 旋法による交唱聖歌(アンティフォナ)のための旋律で、17 世紀の歌集から用いられてきたもの。202 番と同曲。

21-355「主をほめよ わが心」**My Soul, Praise the Lord!**

1. My soul, praise the Lord! / O God, Thou art great: / In fathomless works / Thyself Thou dost hide. / Before Thy dark wisdom / And power uncreate, / Man's mind, that dare praise Thee, / In fear must abide.
2. This earth where we dwell, / That journeys in space, / With air as a robe / Thou wrappest around: / Her countries she turneth / To greet the sun's face, / Then plungeth to slumber / In darkness profound.
3. All seemeth so sure, / Yet nought doth remain: / Unending their change / Obey's Thy decree. / The valleys of ocean / Stand up a dry plain, / Thou whelme'st the mountains / Beneath the deep sea.
4. The clouds gather rain / And melt o'er the land, / Then back to the sun / Are drawn by His shine: / Whereby the corn springeth / Through toil of man's hand, / And vineyards that gladden / His heart with good wine.
5. All beasts of the field / Rejoice in their life; / Among the tall trees / Are light birds on wing: / With strains of their music / The woodlands are rife; / They nest in thick branches / And welcome sweet spring.
6. Lo, there is Thy sea, / Whose bosom below / With creatures doth teem, / Scaled fishes and finned. / Above, the ships laden / With merchandise go, / Nor fear the wild waters, / Nor rage of rude wind.
7. O God, Thou art great! / No greatness I see, / Except Thee alone, / Thy praise to record. / On all Thy works musing / My pleasure shall be; / My joy shall be singing: / My soul, praise the Lord!

21-448「お招きに応えました」**Lord, We Have Come At Your Own Invitation**

1. Lord, we have come at your own invitation, / Chosen by you, to be counted your friends; / Yours is the strength that sustains dedication, / Ours a commitment we know never ends.
2. Here, at your table, confirm our intention, / Give it your seal of forgiveness and grace; / Teach us to serve, without pride or pretension, / Lord, in your Kingdom, whatever our place.
3. When, at your table, each time of returning, / Vows are renewed and our courage restored: / May we increasingly glory in learning / All that it means to accept you as Lord.
4. So, in the world, were each duty assigned us / Gives us the chance to create or destroy, / Help us to make those decision that bind us, / Lord, to yourself, in obedience and joy.